

ふるさと見て歩き

第31回

辰之口八景



▲「船渡の帰帆」推定地

風光明媚な場所を八か所選り出し「八景」と称する場所が各地にあります。有名なものは「金沢八景」、「近江八景」。茨城では「水戸八景」などです。市内にもいくつかありますが、今回は辰之口八景についてご紹介します。

◇八景の起り

八景はもとともと中国の景勝地「瀟湘八景」(湖南省洞庭湖の南にある河川、瀟水と湘水)がいわれとなつています。八景は平沙落雁・遠浦帰帆・山晴嵐・江天暮雪・洞庭秋月・瀟湘夜雨・煙寺晚鐘・漁村夕照で、すべて漢字四字で「地名十風物」で構成されています。このうち下の二字の風物が定形となり、上の地名のみが各地の名勝に当てられるようになったのです。

この原則が確立すると、日本各地で「ご当地八景」ともいえるものが、ふるさとへの愛着から次々と作られるようになりまし。水戸八景は九代藩主斉昭が天保十三年(一八四二)に撰じたものです。しかし、斉昭が選んだ八景は、ただの景勝の地ではありません。八景を詣でて藩士を鍛錬するため遠距離の地を撰じたといわれています。

◇辰之口八景

江戸時代後期の水戸藩の下級役人に加藤寛斎という人物がいます。寛斎はその精力的な文筆活動で水戸の歴史に名を残しました。天明二年(一七八二)頃から慶応二年(一八六六)頃の人といわれ、役人としては

低い階級で、あまり出世せずにその生涯を終えました。彼は役人時代のほとんどをこの辰ノ口堰の堰元役として勤めました。在任中は、辰ノ口江堰を開いた永田茂衛門父子の業績について深い感銘を受け、積極的に史料保存に尽くしました。また永年を過ごした辰之口村への敬意と愛着を込めて、この八景をはじめとして「辰之口御用留」「辰之口の鏡」などを著し、「北郡里程間数之記」でも辰之口村について詳しく書き記しているのです。辰之口八景は次のとおりです。

- ・ 堺沢晴嵐 吹あれし嵐もけふはさりげなく 晴て静けき遠近の山
- ・ 滝沢秋月 村雲のかかると見しは晴行て 秋風にすむ滝沢の月
- ・ 中嶋の落雁 残りなく刈穂の跡の中島に 何慕ふてや落る雁金
- ・ 小坂夕照 夏の日の残る小坂の夕暮は 照添ふまゝに登るくるしさ
- ・ 船渡の帰帆 追風に真帆引かけて百船も 浪路遙に帰り行見ゆ
- ・ 勝養晚鐘 はるたふときくに淋しき入相の 秋にそいかに山寺の鐘
- ・ 遠北の夜雨 独寝の軒端に聞て降雨の 夜半にそいとど淋かりけり
- ・ 鏡山暮雪 かがみ山名にあふからに夕間ぐれ 遠かたかけて晴るる白雪

このうち「鏡山の暮雪」の鏡山は辰之口ではなく、堰元あたりから眺

めた隣接地照山(山方地域)あたりではないかと推測されます。雪を頂いた山々を堰元会所から眺めたのでしよう。「勝養の晩鐘」については村内に「勝養院」という上利員村(常陸太田市上利員町)鏡徳寺の末寺があつたことに由来していると思われる。ほかにも、滝沢・中嶋・小坂などは現在でも字名が確認でき、おおよその場所が推測できます。辰之口の集落のたえずまいを見ていると、秋の夕暮れに雁が田に群れる「中嶋の落雁」や、久慈川を帆船が漂う「船渡の帰帆」の風景が江戸時代そのままに目に浮かぶようです。

辰之口江堰と加藤寛斎の業績については、歴史民俗資料館大宮館で十二月二日まで開催中の企画展「水戸藩の利水事業と永田家三代」でご覧になることができます。

※木村宏「辰之口村八景」(『大宮郷土研究』第七号 平成一五年)および『水戸藩利水史料集』五七頁(一〇〇二年)を参考にしました。



▲「鏡山の暮雪」推定地

(歴史民俗資料館)